

目次:

1) Library of Congress における ICU 研究チーム	
- (1) 第二次世界大戦時における日系人の強制収容に関する調査	1
- (2) GLCA Library of Congress Research Initiative 報告	5
2) FD 活動レポート	
- (1) 米国大学における Teaching and Learning Center の役割	7
- (2) “Advising as Unlearning” - 2016 年 NACADA 年次大会 参加報告	13
3) 学修・教育支援	
- (1) 授業の「反転」	15
- (2) 「タイムマネージメント・ワークショップ」報告	17
4) 役立つ ICT ツール	
- iPad を使用した授業支援	19
5) 新任教員紹介	22
6) 編集後記	26

Library of Congress における ICU 研究チーム (1)

第二次世界大戦時における日系人の強制収容に関する調査

アレン・キム

社会・文化・メディア デパートメント

GLCA-LOC 概要

Andrew W. Mellon Foundation が資金提供した GLCA-Library of Congress Faculty-Student Research Program では、人文科学および社会科学の分野における教員・学生による研究のためにすばらしい機会を提供しています。企画書に基づいて、ICU は 2016 年 7 月 18 日から 7 月 28 日まで、ワシントン DC の Library of Congress での現地調査を行う 3 つの教員・学生チームの 1 つに選ばれました。ICU からは、研究費、住居、および学生の航空運賃サポートが提供されました。学生 3 名、ICU の司書 1 名、そして キム教授が「第二次世界大戦時における日系人の強制収容」に関する調査を実施しました。

Library of Congress での経験

密度の濃い 10 日間、私たちの研究チームは 12 万人以上に及ぶ日系人のアメリカ西海岸地域からの追放と収容についての理解を深めるため、様々なサブピックを取り上げました。私たちの研究チームは、世界最大かつ最も素晴らしい図書館である Library of Congress の研究司書の方から直々にサ

ポートを受け、今まで見たことのないような日系人の強制収容の写真を見たり拘禁されていた人々の証言の書物および動画のアーカイブにアクセスすることができました。その中で、以下のようなたくさんの疑問点をもとに、分析と調査を行いました。



右から一番目 キム教授

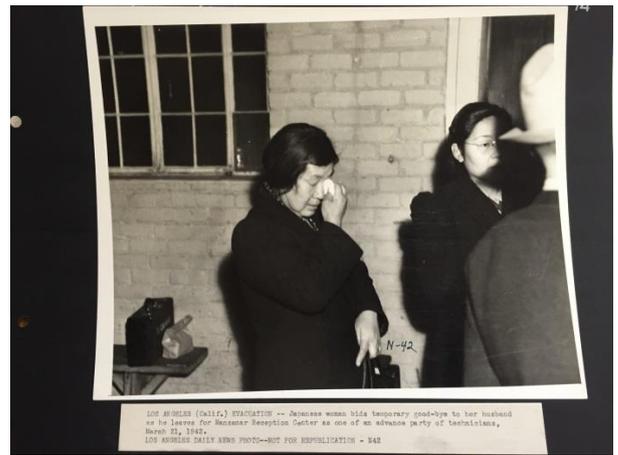
- ・第二次世界大戦時に、日系人はなぜ、そしてどのように拘禁されたのか。
- ・一部の日系人はどのように抑留に抵抗したのか
- ・日系人家族およびコミュニティに対する抑留の影響はどのようなものだったのか。そして彼らがどのように立て直し、前進したか。

この事件から 60 年以上も経った今でも、日本人コミュニティがどのように強制避難を強いられ、極端な状況に晒されたのか、そして彼らが強制避難と抑留に対してさらに抵抗すべきだったのか否かについてはまだ大きく議論が分かれるところです。私たちのチームにおそらく最も強烈な印象を残したのは、特別招待での Ansel Adam による写真原本の閲覧の機会でした。その写真は、第二次世界大戦時のカリフォルニア州にある Manzanar War Relocation Center に拘留された日系人を写したものでした。



私たちは、日系人が自身の所持品を売り、禁制品の検査を受け、そして砂漠や湿地のような土地にある収容所で暮らすことを余儀なくされている姿を映した強烈な写真を見ました。兵舎にプライバシーはなく、時間の経過とともにこれらの収容所は日系人の社会的、かつ政治的な性質を持つ重要なコミュニ

ティとなりました。



現在、多くの学者たちは、日系人（全体の 3 分の 2 がアメリカ市民）の排除と監禁は、単なる戦時の悲劇の産物ではなく、経済競争と人種的な固定概念により煽られた「反アジア」や「反日」の敵意の長い歴史を反映しているという見方で一致しています。社会学者としては、米国史におけるこの悲劇的な時代は、移民、同化、人種差別、世代間の対立、および国家が人々を流刑や国外追放させる過程などの、現代に進行中のプロセスについての洞察を提供していると認識しています。そのため、この日系人の体験は、自分自身のこと、日本に住んでいる「外国人」のこと、そして将来的に私たちが共同で築き上げてゆく国家を、日本の学生が理解することの大きな助けとなります。



キム教授とICU研究チーム

学生によるリフレクション

Lauren Higa 4年生 (OYR)

私たちのチームは、Library of Congress での GLCA プログラムを通じて、日系人の強制収容の体験について詳しく知る機会を頂きました。プロジェクトにおける私の担当は、戦後の体験についての研究でした。具体的には、1960年代のリドレス運動（政府からの謝罪および補償を得るための戦い）がどのように二世のアイデンティティを形成したかという研究です。

Library of Congress にて提供されている膨大な資料は、毎日私を図書館のあらゆる場所へ導いてくれ、学業というより、まるで冒険をしているかのようでした。私が資料を見つけた中で最も印象的だった場所はいくつかあります。例えば、絵画のように美しい天井の高い円形の外観と、一階の机で学術の冒険に出た者を眺めているかのように見える象徴的な像が特徴的なメインの読書室や、歴史的な人物の個人資料を調べられる閲覧室などです。

日系人の強制収容の体験への個人的なつながりがあったため、この研究経験は個人的に意味のあることでした。大統領令 9066 号が発令された後、当時まだ子供だった私の祖父と彼の兄弟は、最大級の収容所の一つであるマンザナー強制収容所で拘留されました。研究を通じて、「リドレス」（過ちを正すこと）のために戦ったのは、家庭、事業、そして誇りを失ったその一世ではなく、むしろ勝ちとったのは、結集した彼らの子供たちだったことを学びました。祖父の世代の過去の体験についての理解を深める上で、この運動を取り巻く歴史と、二世がいかにうまく組織化したかについてさらに多く学ぶことは貴重な経験でした。

Hideaki Furukawa 3年生

まず研究プログラムという形で Library of Congress での研究について学ぶ絶好の機会を提供していただいた Great Lakes College Association と国際基督教大学に心から感謝の意を表します。ワシントン DC での GLCA-Library of Congress Research Program の最初の 1 週間を振り返ってみると、この経験は、私自身の今後の様々な学術研究に必ずや役立つ貴重で素晴らしいものであったことに気づきました。

まず、プログラムを通して、情報収集や研究に必要な資料を収集するのに最も適した場所の一つが図書館であることに気づきました。それは、単に膨大な数の蔵書や購読しているデータベースがあるからという話だけでなく、このプログラムでの研究プロジェクトにおいて、必要な資料の収集を手助けしていただく中で司書の方々の丁寧さと豊富な知識を認識したからです。ICU チームの担当トピックが「第二次世界大戦時の日系人の強制収容」についてであったため、私は各収容所の社会機構に焦点をあ

てました。今まで、この議題に関する研究どころか詳細も知らない状況でしたが、司書の方々による入門講義、アドバイス、そして支援は、さまざまな書類を効率的に収集するのに大きく役立ちました。たとえば、特定の議題に関連する書籍やその他の文書の見出し語を知らなければ、その関心のあるトピックに関するさまざまな資料を見つけるのに、さらに多くの時間がかかったと思います。

ですが、司書の方々は図書館のカタログを利用した検索に必要なさまざまな見出し語と、それに關する関連資料を見つける方法を教えてくれました。今回の研究にとって重要そうな本やその他の資料の一部は、母校の教育機関の図書館に保管されていたり、またはいくつかのデジタルアーカイブを通じて公開されていたのですが、助けていただいた司書の方々の支援がなければ、それを見つけるまでにさらに長い時間がかかったと思います。その優秀な司書の方々やこのプログラム全体を通じて、特に社会科学の分野において必要な資料を収集するためのさまざまな知識と能力を身につけました。その知識と能力は、学部でのレポートやプレゼンテーション、卒業論文、そして卒業後の研究など、今後の様々な機会においての私の強みになると信じています。

Library of Congress に限らず、世界中の他の図書館での研究者による情報と資料の収集の支援における図書館の重要性とその機能について、再考したいと思います。このプログラムの終了後も、研究のために必要な資料を効率的に収集したい場合は、いつでも司書の方々とできるだけ協議し、助けを借りたいと思います。改めまして、Library of Congress での勉強、そして研究する素晴らしい機会を提供してくださった GLCA と ICU に心より感謝したいと思います。

Marina DiCorcia 2年生

今年の夏、私は ICU の他の 2 名の学生と一緒に Library of Congress GLCA Research Program に参加しました。社会学科のキム教授と、大学の司書の山本さんがプログラムを率いてくださいました。私たちはワシントン DC の Library of Congress にて、第二次世界大戦時の日系人の体験の研究のためチーム一丸となって取り組みました。毎日、電車で Library of Congress のあるすばらしい建物へ通学し、建物そのものの歴史的意義と、巨大な図書館の運営システムについて学びました。このプログラムは、あるトピックについて非常に広範囲に（または非常に深く）研究していく中で、その好奇心によって膨大な図書館の資料の中に引き込まれていくという体験をさせてくれる、とてもすばらしいものでした。

Library of Congress-GLCA Research Program では、学生が図書館リソースを効果的に活用して様々なトピックを積極的に研究することを学ぶため、

卒業論文の準備に最適です。またこの経験は、学生に **Library of Congress** のすばらしい機能についての概観を伝え、その図書館がいかに格別かを伝えるとともに、どの大学の図書館にも適用できる便利なスキルを学生に備えてくれます。今年参加した3大学のうちの1つが **ICU** でした。**Library of Congress** からは1名の司書が各チームに派遣されました。私たちの研究テーマについて協議し、また **Library of Congress** で入手できる最も有用な資料を選ぶ方法についての助言をしていただきました。

毎日の8時間に及ぶ図書館での厳しい研究のほか、他の大学の学生や教授、図書館員の方々と会う機会がありました。モロッコの **Al Akhawayn University** の学生と交流したり、オハイオの **Antioch College** の学生とホテルの部屋を共有することは、私にとって忘れられない経験となりました。彼らとは、研究についてのアイデアや資料を交換したり、ワシントン DC を一緒に探索したりしました。

(日本語訳：CTL)

GLCA Library of Congress Research Initiative 報告

山本 裕之

図書館パブリック・サービスグループ

プログラム概要

この夏の10日間、アメリカのワシントン D.C.にある米国議会図書館（以後、議会図書館）で行なわれた調査・研究プログラムに、国際基督教大学チームの一員として参加させていただきました。

このプログラムは、Great Lakes Colleges Association (GLCA)によって組織された国際的なリベラルアーツ大学連盟である「Global Liberal Arts Alliance (GLAA)」と「議会図書館」とが毎年協同行なっているものです。今回は、日本で唯一の加盟校である本学の他に、モロッコと米国の大学の計3チームが選出されました。

プログラム内容

プログラムに招聘された加盟大学は、教員（1名）が策定した研究計画の下、学生（3～4名）、図書館員（1名）でチームを組織し、教員の指導の元で参加した学生が議会図書館の資料を使い、研究テーマに関する調査・研究活動を行ないます。図書館員は学生による資料収集作業の実際を支援するために参加します。

プログラム期間中、各チームにはそれぞれに連絡調整のため議会図書館の司書がつき、図書館を利用するにあたっての細かな面倒を見てくれます。各チームは、主催者側が用意したプログラム（館内見学ツアーやプログラム中盤・終盤で行われる進行状況の報告会など）を除けばそれぞれが別行動となり、学生たちは指導教員との細かな打ち合わせの元で、日々、図書、新聞、写真、マイクロフィルムといった多様な資料媒体にあたって資料の収集を続けます。

議会図書館

ホテルから地下鉄で7駅、議会図書館へ到着です。この世界最大級の図書館は大通りを挟んで建つ3つの図書館で構成されています。各館は地下通路で繋がれており、そこは議会図書館の司書や利用者以外にも多くの人々が行きかっています。図書館の事務や作業を担当するスタッフをはじめとして、テナントのファストフード・ショップ、館内での工事、警備等々の多種・多様なスタッフが搬送用台車を伴って移動し続けるその風景は、この「巨大な知の工場」を稼働させ続けるための巨大なエネルギーを目の当たりにする感があります。

チームが最も多くの時間を過ごした「トーマス・

ジェファーソン館」はこの3つの館の中で最も古い1800年代末の建築物です。館内にはいくつもの目的別の閲覧室が備えられていますが、中でも中央部分にある主閲覧室はひととき見応えがあります。この閲覧室上方には、教会建築を思わせるドームがそびえており、その直下の巨大空間が閲覧室となっています。内部には当時文明の発展に寄与したと考えられた数多くの人物画や塑像が飾られ、この部屋に一種荘厳な雰囲気を与えています。

調査・研究テーマ

ICU チームのテーマは、「日系アメリカ人の強制収容」です。これを、第二次世界大戦前期（大量収容へと繋がる人種差別）、戦中期（収容所での苦難と抵抗）、戦後期（戦後の遺産：苦痛、沈黙、補償）の3期に分け、3名の学生が分担して担当しました。

学生たちのそうした資料収集を手伝う中で、私自身、一口に「日系アメリカ人」と言っても、世代間でその在り様に大きな相違があることに気がつきました。また更に、「日系アメリカ人」と一口で呼ばれる集団が、はたして実在するのか、という疑問もわいてきました。

考えてみれば「一世」と呼ばれる移民者本人のアイデンティティは「日本人」です。言わば、彼らは合衆国に出稼ぎに来ている「日本人」に過ぎませんでした。日本人として生まれ、その文化・風習を身に纏ったまま、異邦人としてアメリカに生きた人々です。

一方で、彼の地で「一世」たちの子として生まれた「二世」以降の世代は、生まれながらにして「アメリカ人」です。アメリカ人の社会に生まれ、育ち、「アメリカ人」の文化・風習を身に纏った「アメリカ人」以外の何者でもありません。彼らにアイデンティティを問えば、自明のこととして「アメリカ人」と答えるでしょう。

こうしてみると、強制収容を受けた「日系アメリカ人」とは、実は「日本人」と「アメリカ人」だけであって、「日系アメリカ人」とわかりやすくくくりと呼ばれる実態は、そこにはないようにも思われます。

また、世代間の相違は、それ以上に彼らそれぞれの世代が持つ自明な「アイデンティティ」の相違でもあったわけですから、家族でありながらまったくの別のアイデンティティを持つ彼らが、「収容

所」という閉鎖された環境の中で、強制的にいくくりの処遇を長期にわたり余儀なくされた間には、同じ「日系アメリカ人」同志で、互いに傷つけ合うような事態も数多く招いたのではないかと想像されます。

以上、簡単なプログラム概要と所感に留まりますが、貴重な経験をさせていただきました今回のプログラムと大学とに感謝いたします。

FD 活動レポート (1)

米国大学における Teaching and Learning Center の役割 ～リベラルアーツ・カレッジ訪問の報告

小林 智子・紀平 宏子
学修・教育センター

はじめに

2016年9月17日から23日まで、GLAA (Global Liberal Arts Alliance)¹ の Inter-Institutional Visit Program という制度を利用し、アメリカのリベラルアーツ・カレッジを訪問させていただく機会をいただいた。訪問先は、GLCA (Great Lakes Colleges Association)² 加盟大学の中の Kenyon College、Denison University、Oberlin College、Albion College の4校で、主に Teaching and Learning Center を見学し、どのような活動をしていて、どのように機能しているかなどを参考にさせていただくのが今回の訪問の目的である。

これらの大学の Teaching and Learning Center は、ICU の CTL と違い、どちらかというとファカルティ・ディベロップメントなどティーチングの支援がメインであったが、あわせて、アカデミック・アドヴァイジングや学修支援、新入生向けのメンタープログラムなどに関しても様々なお話をうかがうことができた。

各大学における FD 活動について

各大学の CTL にあたるセンターとして、Kenyon College の Center for Innovative Pedagogy (CIP)、Denison University の Center for Learning and Teaching (CLT)、Oberlin College の Center for Teaching Innovation and Excellence (CTIE)、Albion College の Center for Teaching and Learning (CTL) を訪問させていただいた。どのセンターにおいても、様々な形で、学修と教育に関する、教員の方々の経験やアイデアなどを共有しサポートする機会と場所を提供していた。中でも、Denison University と Oberlin College の活動は大変興味深く、参考になるものも多いので、そのうちのいくつかをここでご紹介したい。

Denison University の CLT は、図書館の中に配置され、センターはまだできて間もないが、初代ディレクターの Frank 教授は、これまで、学内の FD 活動を牽引してきた人物であり、豊富な人脈で、様々なプロジェクトを進める上でのハブとしての役割を担っている。

“Teaching Matters!” というインフォーマルな

ディスカッションは13年以上続けているという。ティーチングやラーニング、教授法(Pedagogy)、カリキュラムなどに関するトピックで、ラウンドテーブル・ディスカッションやワークショップ、ゲストスピーカーを招くなど、形式も様々である。月に1回、定期的にかかれ、学内の教員がティーチングに関する知識や経験を共有できる場となっている。若手の教員3名によって運営されており、テーマの設定や講師への依頼、内容についての打ち合わせから広報まで、彼らが行っている。“Teaching Matters!” における過去のトピックは、例えば次のようなものである。ICTの活用に関連したトピックはほとんどなく、“Teaching” にフォーカスされている。

Finding Your Teaching Style (Discussion Groups)
Racial Diversity at Denison: How Does It Affect Our Teaching? (Guest Speaker)
Motivating Students (Discussion Groups)
Working With Heterogeneous Groups (Discussion Groups)

“First-Year Faculty Learning and Teaching Seminar”は、1年目あるいは新しく着任した教員向けのセミナーで、学修や教育のプロセスについての議論を提供することで、新任教員のコミュニティを形成し、関わりを深めて行くことが期待されている。学期に4回ほど集まり、あらかじめ選定された本を読んで、ディスカッションを行うというような形式であるが、例えば次のような本が使われている。

Ambrose, S. A., M. W. Bridges, M. DiPietro, M. C. Lovett, M. K. Norman, & R. E. Mayer. 2010. *How Learning Works: Seven Research-Based Principles for Smart Teaching*. New York: Jossey-Bass.
Lang, J. M. 2008. *On Course: A Week-By-Week Guide to Your First Semester of College Teaching*. Cambridge, MA: Harvard University Press

“Early-Career Faculty Learning Community: Resources and Strategies for Effective Teaching

¹ GLAA は、世界 15 カ国から 29 のリベラルアーツ大学が参加する大学連盟で、ICU は、2014 年 3 月に加盟した。
<http://www.liberalartsalliance.org/>

² GLCA は、五大湖周辺にある 13 の私立大学からなるコンソーシアムで、GLAA の事務局の役割も担っている。

and Learning”は、インフォーマルな形で、読書やディスカッションを行う教員のラーニング・コミュニティで、リソースの提供、情報や事例の共有により、着任2年目以降の若手教員がお互いに協調してサポートしあっているような関係を気づいていくことを目的としている。こうした集まりが、自身の教員としての成長に大変役立ち、また、そのグループ内で支え合い協力しあえる良い関係がその後も続くという。

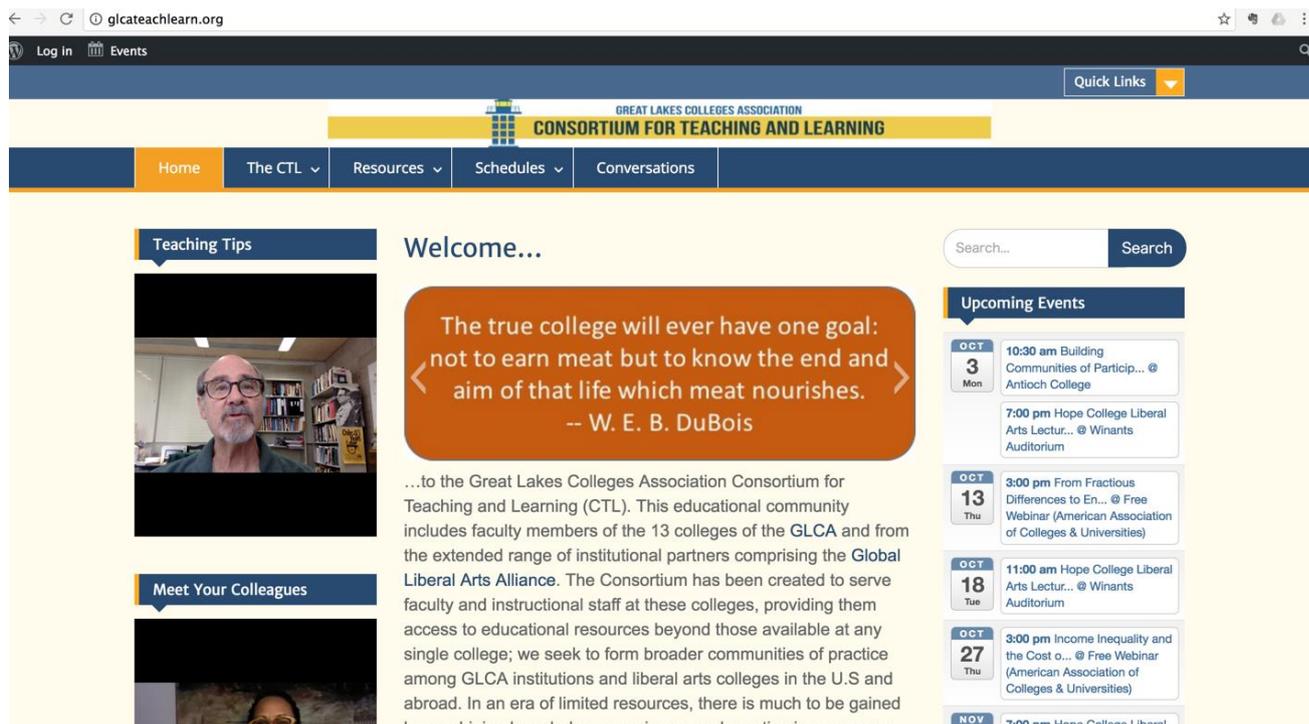
Oberlin College の CTIE においても、教員がティーチングに関する経験や試みなどを共有し、協力し合うことができるような様々な試みが行われていた。着任してまだ日の浅い教員向けには、シラバスの作成やレビューからクラス内での学生対応など、様々なことについて一対一でのコンサルテーションや、授業のオブザベーションなども行われている。授業のオブザベーションは、事前にインタビューを行った上で授業を見学し、授業後にディスカッションなどによりフィードバックを行う。授業を収録することも可能である。相談内容やオブザベーションの内容はコンフィデンシャルで、デパートメントや Dean's Office への報告は行わない。教員の評価とは切り離されている。そういう意味で、相談を受けるセンターの教員は評価にはいっさい関わらない存在である必要がある。

CTIE ディレクターの Steve Volk 教授は、GLCA の Consortium for Teaching and Learning の共同ディレクターの一人でもあり、できたばかりの GLC のバーチャルな Teaching and Learning Center のウェブサイトを紹介してくださった。GLCA の加盟校の間で、様々なリソースや情報、それぞれの大学における FD 活動のイベントを共有するなど、コンソーシアムの他のメンバーとコラボレーションが可能な仕掛けが用意されていた。

これらの活動の様子を伺い、小さなグループで良いので、定期的にワークショップやイベントを開催していくことが大切だと感じた。ワークショップの内容はもちろん、その場でのディスカッションなどを通して同じ分野でも違った分野でも教職員のコミュニティが形成されていくことは大変価値のあることである。そうした活動に CTL のオープンスペースを活用していきたい。また、FD Newsletter や CTL の Web サイトなどで、ちょっとした工夫やアイディアなどを共有していくことができればと思う。



Center for Learning and Teaching at Denison University



GLCA の Teaching and Learning Center ウェブサイト (<http://glcateachlearn.org/>)

Albion College の新入生向けプログラム

ここまでは教員に対するプログラムを中心に紹介してきたが、学生への取り組みもいくつか紹介したい。Albion College の新入生向けオリエンテーションプログラム「First Year Experience Program(以下 FYE Program)」は、ICU にもぜひ取り入れたいと感じた取り組みのひとつである。FYE Program は主に「First-Year Seminars」「Peer Mentor Program & Community Meetings」というプログラムから構成され、2000 年から現在まで継続的に提供されている。

1 つ目の「First-Year Seminar」はライティングとディスカッションを軸として構成される学際的なコースで、Albion College での学びに新入生がスムーズに慣れることができるよう 1 年生の 1 学期に開講される。新入生は 15 人程度の少人数ゼミに分けられ、1) 知識を効果的に・倫理的に・責任感を持って使う、2) 分析的に・批判的に・クリエイティブティを持って知識にアプローチする、3) 口頭・文章両方で有効なコミュニケーション能力を養う、4) 多角的な視野を持って知識と情報にアプローチする、5) 彼ら自身の学びとそのプロセスに対して批判的な視点を持ち続ける、という 5 つの能力を身につけていく。

もう一つの「Peer Mentor Program & Community Meetings」は 3・4 年生をメンターとして、週 1 回「コミュニティミーティング」を開催するプログラムである。メンターにはミーティング用の予算がついているのでお茶やお菓子などを毎回用意し、カジュアルな雰囲気の中で 1 年生がつまず

きがちな学習面・生活面での問題について語り合える場所となっている。Albion College では 1 年生は全員寮生活が義務付けられているため、急激な環境の変化に戸惑う学生が多いというが、そんな中で上級生との関わりを週 1 回持つことができるこの時間は意義あるものとして位置づけられている。不参加が続く新入生はトラブルを抱えている可能性もあり、異変の早期発見という点でも重要だ。また、このプログラムではアカデミックスキルについてのアドバイスも行う。例えば 1 年生とメンターのテキストやノートを比較し、テキストのハイライトやノートテイキングの違いを確認することで、上級生のテクニックを習得するといった企画が組まれることもある。

この「Peer Mentor Program & Community Meetings」の 1 年生に対するメリットは計り知れない。アカデミックなことを損得なしで語れる空間がある、自分をガイドしてくれる存在がいるという安心感は、新入生にとってかけがいのないものだろう。

これらのプログラムを ICU に当てはめると、「First-Year Seminars」については ELA が代わりの受け皿となってきている部分が多い。一方で、「Peer Mentor Program & Community Meetings」は、一部 IBS と共通する部分はあるが、「新入生が対象の」「全員に参加義務のある」プログラムという点でその性質は大きく異なる。大学生活が軌道に乗るまでの伴走役として、ICU にも新入生に特化したメンタープログラムを導入する意義はあるのではないだろうか。

その他の気づき

今回の視察ツアーを通じて感じたことをいくつか紹介したい。今回訪れた大学は全てリベラルアーツ・カレッジだったわけだが、受験生や一般の人々に対するリベラルアーツのアピール方法がICUと全く違うことに驚いた。ICUは大学説明会などにおいて「メジャー制を導入しており、学際的に学ぶことができる」という点を強調している。そしてそのメリットとして *late specialization*、つまり1・2年生で様々な学問分野に触れたあと、本当に自分の学びたい学問を学ぶことができる点をしばしば挙げている。確かにそれは事実ではあるのだが、今回訪問した大学におけるリベラルアーツのアピール方法はICUのそれとは少し異なり、最も強調していたのは「リベラルアーツ教育により、ひとつのトピックを多角的な視点から分析することが可能になる」という点だった。例えば「テロ」というトピックの背景には経済・文化・宗教・歴史・教育・政治などさまざまな要素が複合的に絡み合っている存在しているが、リベラルアーツによって分野を超えた知見を得ることにより、複合的な視点からトピックを考察・分析する力を付けることができる、むしろリベラルアーツだからこそそれができると強調していたのである。これには正直なところ目の覚めるような思いがした。*Late specialization* ももちろんひとつのメリットではあるのだが、リベラルアーツの本質かと問われれば違うように思う。アメリカのリベラルアーツ・カレッジで発信されるメッセージはICUが掲げる「地球市民を作る」という使命により合致するように思った。

以降は余談になるが、どの大学もPR用資料やパッケージ、公式グッズがことごとくスタイリッシュなことが印象的だった。もらっただけで嬉しくなってしまうような文房具類もさることながら、資料を入れるパッケージの裏面に学内地図を配置するアイデアは、デザイン性と利便性の両方を兼ね備えていて、ぜひ参考にしたいと感じた。またどの大学もステッカーをパッケージに同封しているのだが、当然のようにデザイン性が高く、思わずいろいろな場所に貼りたくなる。ICUでも受験生など特に親和性の高い層に配れば、想像以上に高い広報の効果が生まれるのではないだろうか。またアイデアとして目から鱗だったのは、広報資料を印刷物ではなく、学校ロゴの入ったフラッシュメモリに全て入れてくれた大学があったことだ。必要な情報を取り出した後も、USBは必ず再利用するのでかなり長い間目につく場所に置いてもらえる。予算の問題を度外視したアイデアではあるが、例えば受験生向けに学校案内をUSBに入れてオープンキャンパスのお土産として配布すれば喜ばれると思う。オリジナルスクリーンセーバーなどのコンテンツも入れて、自分のPCに設定してもらうことでモチベーションアップに利用してもらっても良いかもしれない。



終わりに

学修・教育センターとして活動を開始して2年目に入り、ICUの中でどのような役割を果たし、どのような方向に向かって、どのような立場で活動を行っていくのがよいか、あらためて考える良い機会となった。教員と職員と一緒に訪問することで共通の認識を持つことができたことも良かった。訪問中、何人かの先生とお話する中で、センターは、**Formative Development**に関するサポートを行うところであり、**Summative Evaluation**には関わらるべきではないとおっしゃっていただいたことが印象的であった。ICUのCTLは、学生も教員もいつでも気軽に相談でき、必要な支援を受けることができる場所である。学生の学修のサポートとともに、教育・アドバイジングを行う教員のサポートを丁寧に行い、大学全体のティーチングとラーニングの質の向上に貢献していきたい。

関連情報

それぞれの大学の様々なセンターやオフィスを訪問し、お話を伺う中で、参考にしたい情報もあったので、ここに共有させていただく。(これらの内容は、CTLのWebページでもリンクや情報を共有していきたい。)

- Center for Teaching Innovation & Excellence (CTIE), Oberlin College
<http://new.oberlin.edu/office/ctie/>
- *Article of the Week* (CTIE, Oberlin College)
<http://new.oberlin.edu/office/ctie/articles-of-the-week/>
CTIEのディレクターは、CTIE Article of the Weekというメールマガジンを、毎週日曜日に配信している。内容は、授業の実践例やテクニック、教育や学修に関するイベント、大学教育に関する話題などで、特に、シラバスの準備や授業開始1週間目、学期中の中間評価など、タイムリーな話題も盛り込まれている。
- The Cooper International Learning Center (Oberlin College)
<https://languages.oberlin.edu/language-resources/japanese/>
語学の自習用アプリやサイトなどが紹介されている
- *Faculty Newsletter* (Center for Learning and Teaching, Denison University)
<https://blogs.denison.edu/facultynewsletter/teaching/>
- GLCA Consortium for Teaching and Learning
<http://glcateachlearn.org/>
GLCAのバーチャルなCenter for Teaching and Learning
 - Teaching Tips (ビデオメッセージ)
 - Meet Your Colleagues
 - Resources (Teaching and Learningに関する様々なリソース)
 - What We're Reading
 - Upcoming Events (それぞれの大学におけるFD活動のイベントを共有)
- Advising Syllabus and Checklist (Office of Academic Advising, Kenyon College)
http://www.kenyon.edu/files/resources/advising-syllabus_6-30-2015.pdf

[アクセシブルな電子教科書]

- Bookshare
<http://www.bookshare.org/>
Bookshare provides print books for people with print disabilities at a low cost (free for US students).
- Project Gutenberg
<https://www.gutenberg.org/>
- AccessText Network
<https://www.accesstext.org/https://www.albion.edu/images/sites/lsc/documents/students-on-the-spectrum-discussion.pdf>

印刷物を読むことに困難のある学生は、視覚に障がいのある学生だけではない。AccessText Networkは、教員は教科書をコピーして授業中に配布するのではなく、その代替となるオンラインのテキストを探すことで、様々な学生に配慮することができるようになる。

[その他]

- ClaroRead
<http://www.clarosoftware.com/>
Reading や Writing に困難を抱える学生をサポートするソフトウェア
- "Students on the Spectrum Discussion"
<https://www.albion.edu/images/sites/lsc/documents/students-on-the-spectrum-discussion.pdf>
Outline of a presentation about students with disabilities and tips for instructors given by Pam Schwartz fin the November 2014.
- Universal Design for Learning
http://ada.osu.edu/resources/fastfacts/Universal_Design.htm
障がいのある学生や留学生、様々な特性を持つ学生に対して等しく情報を提供するためのユニバーサルデザインというアプローチについてのハンドアウト

“Advising as Unlearning” ～2016年 NACADA 年次大会 参加報告

大枝 さやか

アカデミックプランニング・センター

2016年10月5日～8日に米国アトランタで開催された NACADA (National Academic Advising Association) 年次大会に参加しました。NACADA は在米のアカデミック・アドヴァイジングの学会および職能団体で、主に米国内でカンファレンスや研修を行っています。アカデミックプランニング・センターは設立当初から NACADA のカンファレンスや研修に積極的に参加し、アドヴァイジングの最新事情に通じるとともに、より高い知識や先進的な実践例を取り入れるよう努めてきました。今回参加した年次大会は、毎年秋に開催される最も規模の大きなカンファレンスで、3,500名を超えるアカデミック・アドヴァイザーおよび大学関係者が集いました。

年次大会は初日の冒頭に **Keynote address** を全員で聞いた後、さまざまな分科会の中から興味のあるものを選んで参加するスタイルです。分科会の一つ、“Advising as Unlearning” (Sarah Stevens from University of Southern Indiana, Leah Jackson from New Jersey City University) を紹介します。

Unlearning は日本語で「学びほぐし」「脱学習」などといわれるもので、さまざまな定義や捉え方があるようです。ここでの **Unlearning** は、これまでに学習したことでそのとき(過去には)機能していたが、大学生・大人としては生産的・効率的ではない考えや行動に気づくという意味で使われています。そして次に **Relearning** (学び直し) が続きます。このプロセスは放っておけば自然に起きるものではなく、**Deliberate process** (意図されたプロセス) とされています。ではアドヴァイザーは、どのようにして学生の **Unlearning** を促せるのでしょうか。

学生がこれまでにどこかで学習し、大学以降の人生では有効に機能しない例として、試験前の一夜漬け、課題の先延ばし、完璧主義、非現実的なゴール設定、否定的な心の声、ステレオタイプ、あらゆる文化的偏見などが挙げられます。アドヴァイザーはまず、学生の様子を注意深く観察しながら話を傾け、現状を把握します。学生は既に何を学び信じているのか、過去に獲得した考えや信条、行動は現在有効に機能しているのかを探索するのです。

続いて、対話をしながら学生に振り返りを促しますが、ここで大切なのは相手が安心して話せる環境です。**Unlearning** にはときに痛みを伴います。これまで頼りにしてきた考え方や慣れ親しんだ行動を否定することは、自分自身の一部を捨て去るように感じられるかもしれません。特にステレオタイプ

や文化的な偏見に関しては、高校生のとしまで属していた比較的小さく閉じたコミュニティにおいては、当たり前のように周りの人たちと共有されていたことかもしれません。それらに疑問を持ち(**Unlearn**)、考えを改める(**Relearn**)という過程では、自身のアイデンティティや所属意識が脅かされると感じることもあるでしょう。アドヴァイザーは、**Unlearning** のプロセスで経験する辛さを理解し、忍耐強く付き合うとともに、思いやりのある献身的な姿勢が一貫して求められます。

学生自身の能動的な振り返りによって **Unlearning** が進みます。文章による表現を勧めたり、再度アドヴァイザーに話しに来よう勧めたりして、学生に自己との対話を促し効果的なサポートを提供するのがアドヴァイザーの役割です。

学生はしばしば、アドヴァイザーは何でも教えてくれる人、自分の問題を解決してくれる人だと思っているようです。そのような学生はアドヴァイザーを、いわばコンシェルジュだと認識しているといえます。そのためすぐに答えを得られなかったり問題が解決しなかったりすると、がっかりしたり腹を立てたりします。このようなことに関しても学生の **Unlearning** が必要であり、アドヴァイザーはどのような役割を持つのか、学生の責任とは何かを丁寧に教え伝えていく必要があります。

アドヴァイザーはコンシェルジュではありませんが、コンシェルジュと異なるアドヴァイザーの姿とはどのようなものなのでしょう。以下が挙げられました。

- ・ 学生に指示を与える時間を最小限にとどめ、一緒に調べ探索する時間を多くする
- ・ 学生のリスクを肩代わりするのではなく、リスクの取り方を教える
- ・ 学生を監督するのではなく、これまでの学びを統合しこれからの学びをデザインする手助けをする
- ・ カウンセラーとしての要素は控えめにし、学生を真に評価する存在となる

Unlearning は大人になっても生涯を通して続けていくものです。アドヴァイザーも常に自分自身にチャレンジし、**Unlearning** を続けることが求められます。

ここからは私の感想となります。

Unlearning の概念は日本で耳にしていたましたが、

アドヴァイザーとアドヴァイジーのやり取りに当てはめて考えるのは新鮮でした。アドヴァイザーが答えを与えるのではなく、アドヴァイジーが主体的に考え自らの答えを見つけられるように導くことや、一緒に解決策を調べる重要性はよく理解していましたが、学生の **Unlearning** を促していると感じてみると、深い教育的なインパクトを持つ行為であると気づかされます。

今までの考え方を捨てる必要がある点、それによって自らを解放し新しい考えや行動を獲得する点、生涯をかけて続けていくものである点など、**Unlearning** はリベラルアーツに似ていると感じました。本学のリベラルアーツ教育は全人教育に重きを置いています。学生を思いやり、献身的な姿勢で臨むことや、学生の振り返りを促す対話を心がけるといった話から、アドヴァイジングは全人教育を担うものであり、人間味のある営みであることを改めて意識させられました。

授業の「反転」

ジェレマイア・オルバーグ

人文科学デパートメント / 学修・教育センター長

定義

本稿では、私自身の「反転授業」の経験について簡単な報告と評価を行いたいと思います。ウェブ上で見つけた反転授業の定義は以下の通りです。「反転授業とは、授業における講義と宿題の要素を逆転させる教授法です。学生は授業前に自宅で短いビデオ講義を視聴し、授業時間は、演習やプロジェクト、またはディスカッションに充てられます。<https://net.educause.edu/ir/library/pdf/eli7081.pdf> 参照)

この定義は、私の経験の核心をうまくとらえていると思います。以前は授業で取り上げていたであろう教材を、別の形態で、また別の時間に学生が利用できるようになったため、今では授業時間を演習やディスカッションの時間に充てることができます。

背景

このアプローチに興味を持ったのは、その効果について非常に大きな疑いを持っていたからです。過去 100 年間に現れた新しいテクノロジーは、教室に改革をもたらす可能性があったにもかかわらず、未だに私たちの目の前にあるのは黒板、教卓、そしてずらっと並んだ学生たちなのです。より多くの画面が教室に置かれたり、オーディオビジュアル教材を使う機会が増えるなどの小さな変化は除いて、改革はまだ起こっていません。教科書を授業前に読むことに加え、私が単に一時間の授業を録画して、その講義を授業外で見ておくよう伝えることが一歩前進になるとはとても信じられなかったのです。

もちろん、信じられなくても当然で、反転授業とはこのようなものではありませんでした。以下のような違った理解をすることで、すんなり受け入れることができました。講義全体を録画するのではなく、短い形式で要点をまとめたテキスト付きの動画を提供しました。録画したビデオはすべて 10 分ほどで、10 分程度の動画であれば、学生は飽きずに動画を見ることができます。

私が興味を持ったのにはもう一つ理由がありました。私は去年 4 月に CTL の Director に就任したのですが、これは教室でのテクノロジーの使用について熟知・精通する必要があることを意味したのです。私は、このテクノロジーの使用方法について取り組んだ上で経験に基づいた知識をもって同僚の先生方に話をしたかったのです。

Center for Teaching and Learning の Assistant Director である小林さんと MIT の宮川

教授との協議の上、学生が授業前に講義を視聴し、授業時間をディスカッションに充てられるよう、講義の一部を録画するため CC Producer というソフトウェアを使用することに決めました。

導入の準備

これから手順を追ってご説明したいと思うのですが、その際、初期の失敗や不具合、また初回の講義の録画および再録画を強いられた回数などについては言及しません。なぜなら、これらの試行錯誤の全てが、新しいアプローチで何かを学ぶ方法の一部だからです。そこで、今回はすべてが円滑に進んだ場合にどうなるかお見せしたいと思います。

まず初めに、CC Producer というソフトウェアのアカウントを取得しました。これは、どのコンピュータからログインしてもビデオの作成が可能であることを意味します。必要なものはインターネット接続されたカメラとマイク付きのコンピュータのみでしたので、試行錯誤をして、最終的には自分のオフィスで使っている iMac に決めました。iMac は自分の音声の少し小さい事を除けば、問題ありませんでした。

手順

ビデオの製作は次の手順で行なわれました。まず、Microsoft Power Point プレゼンテーションを作成することから始めました。私はそのプレゼンテーションを、どちらかというと講義で使う自分の発言の要約として使用していましたが、テキスト量があまりにも多く、画像や動きが足りないためつまらないものになっていました。次に、パワーポイントを PDF ファイルとして保存し、それを CC Producer へインポートしました。10 分間の講義には、タイトルスライドを含む 7-8 枚のスライドで十分だと気づきました。スライドの準備が終わり次第、カメラとマイクの電源を入れ、録画をはじめました。要点を説明しつつ、難しい部分の理解を促すよう教科書の内容についての講義を行い、10 分ほど経過した時点で録画をやめました。まれに 3 本必要なこともありましたがほとんどの章は 2 本のビデオで事足りました。

録画が完了次第、ビデオと音声を確認してから保存し、SCORM パッケージとして Moodle にアップロードしました。(かつての私のように SCORM パッケージになじみのない方は、Moodle の「Add an activity or resource」タブをクリックすると見つか

ります。)最後に、5問からなる正誤問題の小テストを Moodle にて作成しました。学生はビデオを見た上で、その小テストを受けることになっています。小テストの受験は一回限りで、できるだけシンプルに作成しました。この小テストは、もちろん Moodle によって自動採点されるため、これ以上の作業は必要ありませんでした。

10分のビデオを初めから終わりまで制作するのに約1時間ほどかかり、1学期中にこのようなビデオを29本作成しました。次のような作業のステップをつかんでからは、より簡単になりました。それは1) Power Point の作成、2) PDF 形式での Power Point ファイルの保存および CC Producer へのインポート、3) 講義の録画、4) 確認、5) Moodle へのアップロード、6) 小テストの作成というステップです。

つまり基本さえ押さえてしまえば、誰の助けも必要とせずに、これらのビデオの作成が可能でした。オフィスで作業をしている私とコンピュータのみですべてが完結できたのです。作業ファイルの紛失や、また学生からの不具合についての苦情も一切来ていません。

どのように使われるようになったか

このスタイルで授業を行った科目は、90名ほどの学生が登録している一般教養科目の「Introduction to Christianity」でした。学生はビデオを見た上で、ポイントを獲得するためには授業前に小テストを受ける必要がありました。私の授業コンテンツの多くがウェブ上にある今、授業で何をしようかと不安だったのですが、その心配は必要ありませんでした。どんな授業でもさらに深く掘り下げる事が可能です。内容について知れば知るほど、さらに多くを学ぶことができたのです。

私の授業ではコメントシートが非常に重要な役割を果たすようになりました。それぞれの授業の最後に学生からすばらしい質問を受け、次回の授業の前半の30-40分を使ってこれらの質問に答えたりコメントに返答することができました。

このアプローチは、私の教育を劇的に変化させたわけではありませんが、学生たちに一方的に話すのではなく、より学生たちと話す事ができたと感じました。この規模の授業になると、良いディスカッションを行うことが可能ではなかったため、多くの場合4-5人の小さなグループに分け、教科書から想起された疑問に取り組んでもらいました。

学生の反応

多くの学生は、ラーニングログという別の課題も行っています。そこには学期中の学習過程の振り返りに役立つよう設計されたいくつかの質問があります。学期の中盤に、ビデオが役立っているかを問う質問を1つ入れたのですが、その質問に対する反応は圧倒的にポジティブでした。多くの学生は、これ

らのビデオ講義がなければ教科書を理解できなかったと言っており、また、動画内のテキスト部分も高く評価していました。

この中でも、母国語が英語ではなかった人には特に高い評価を得ました。講義を何度も見直すことや、私が話した言葉がテキストとして記載されている点に満足していたようです。彼らはビデオを止めてメモを取ったり、巻き戻して再びセクションを視聴することができます。このすべてに関して学生達の反応はポジティブでした。主な苦情は声の聞き取り難さについてでした。また彼らは、小テストが強制的にビデオに集中させ、うたたねを防止する重要なツールであると認めました。苦情の中には、いくつかの「不明確」または「トリッキー」な質問のせいで点数を逃したというものもありました。

評価

ある意味では、個人的な印象の話をするぐらいしかできないほど、何かの結論を下すには時期尚早で、なおかつサンプル数も少ないと思います。また、このビデオを次回に使う場合には、私の評価も変わるかもしれません。今回は多くの作業を必要としましたが、次回からは作業が全くありません。ただ全体を通して、私自身は楽しめたと言えるでしょう。前述した通り、学生たちとより良い関係を築けたと感じていますし、彼らは質問をするために必要な基本的知識を得た状態で授業に参加してくれました。これらのリソースが、英語開講の授業の履修に非常に役立っており、学生達は非常にポジティブに評価しているということ、また中には非常に感謝の気持ちを持っていてくれる人がいる事を知り、非常に嬉しく思いました。

私は他の教員の皆様がこのアプローチを試してくれることを願っています。この方法が学生にとって、ELAから英語開講の授業への移行に役立つ方法になり得ると思っているからです。その上で、いくつかの推奨事項があります。

まず第一に、もしこの方法に興味がある場合、過去に教えた経験があるコースで、かつ精通している資料を選ぶことをお勧めします。新しいテクノロジーを投入する以前に、新しいコースの設計にはそれだけで十分なストレスがあるからです。第二に、ビデオを作るのに十分な素材がある強力な「講義」要素を持つコースである必要があります。第三に、ビデオの製作方法の基礎を学ぶための余裕がある時間を選んでください。他の授業やミーティング、プロジェクトで多大なプレッシャーを抱えている状況で習得したいとは思わないでしょう。ですが、一度学んでしまえばそれは簡単にできるようになります。

(日本語訳: CTL)

学修・教育支援 (2)

「タイムマネジメント・ワークショップ」報告

大枝 さやか
アカデミックプランニング・センター

- ・ 学期中はいつも課題に追われている
- ・ 友人に何かを頼まれると断れない
- ・ LINEやSNSにかなり時間を取られている気がする
- ・ もっとゆとりのある健康的な生活をしたい・・・

といった学生を対象に、「タイムマネジメント・ワークショップ」を開催しました。2016年6月23日、24日、29日の3日間で全3回開催したところ、15名（1年生10名、2年生3名、3年生1名、4年生1名）の参加がありました。

タイムマネジメントは大学生が身に付けるべきスキルとして、アカデミック・アドヴァイジングの世界では大変重要視されています。米国のアカデミック・アドヴァイジングの職能団体である National Academic Advising Association (NACADA) においても、学生がタイムマネジメント・スキルを身

に付けるのは必須とされていて、そのようなスキルを教えることはアドヴァイザーの役割のひとつといわれています。

本ワークショップではまず、時間管理のマトリックス（"Time Intelligence" Matrix）を使って、参加者にふだんの自身の思考・行動パターンを振り返ってもらいました。"Time Intelligence" Matrix（時間管理のマトリックス）

効果的に人生を営む人は、第三領域（Distractions）と第四領域（Escape）を避けようとします。なぜなら緊急であろうがなかろうが、重要ではないからです。そして第二領域（Zone）に時間を投資することによって、第一領域（Crisis）の問題をなくすようにします。

参加者の様子を見ると、第一領域（Crisis）と第四領域（Escape）は容易に理解できたようでしたが、

“Time Intelligence” Matrix (TIM)

		緊急	緊急でない
重要	第一領域 CRISIS	すぐに対応が必要で、それが大切な結果と結びついているもの 例：締切が迫っている仕事、クレーム対応、病気、事故、災害 Example: Effect: ストレス、バーンアウト、疲れ切ってしまう	将来への投資、真に重要なこと 例：準備や計画、勉強、人間関係づくり、貯蓄、健康維持、リクリエーション Example: Effect: ビジョンが持てる、生活のバランスがとれる、心身の健康が維持できる、人間関係が改善する、物事をコントロールできている感覚(自尊心)、不安を予防できる、Crisisが少なくなる
	第三領域 Distractions / The illusion of productivity	自分では重要だと思っているが、実はそうではないこと 例：意味の薄い付き合い、目標を立てて実行しない、非効率な勉強 Example: Effect: 視野が短期的になる、目標や計画が無意味に感じられる、いつも忙しいのに目標が達成できない、八方美人('Yes' Person)に見られる、ほかの人の優先順位や期待に振り回される	逃避行動、眠つぶし。 例：ネットサーフィン、ゲーム、TV、SNSをずっとやっている Example: Effect: 遅れを取っている気持ちになる、やるべきことを先延ばししている罪悪感
重要でない	第一領域 CRISIS	すぐに対応が必要で、それが大切な結果と結びついているもの 例：締切が迫っている仕事、クレーム対応、病気、事故、災害 Example: Effect: ストレス、バーンアウト、疲れ切ってしまう	将来への投資、真に重要なこと 例：準備や計画、勉強、人間関係づくり、貯蓄、健康維持、リクリエーション Example: Effect: ビジョンが持てる、生活のバランスがとれる、心身の健康が維持できる、人間関係が改善する、物事をコントロールできている感覚(自尊心)、不安を予防できる、Crisisが少なくなる
	第三領域 Distractions / The illusion of productivity	自分では重要だと思っているが、実はそうではないこと 例：意味の薄い付き合い、目標を立てて実行しない、非効率な勉強 Example: Effect: 視野が短期的になる、目標や計画が無意味に感じられる、いつも忙しいのに目標が達成できない、八方美人('Yes' Person)に見られる、ほかの人の優先順位や期待に振り回される	逃避行動、眠つぶし。 例：ネットサーフィン、ゲーム、TV、SNSをずっとやっている Example: Effect: 遅れを取っている気持ちになる、やるべきことを先延ばししている罪悪感

Covey, R.S. (2014) *The 7 Habits of Highly Effective People 25th Anniversary Edition*, Turtleback コヴィー・R・スティーブン(2010)『7つの習慣』キングベアー出版
 注：執筆者により一部改変

第二領域 (Zone) と第三領域 (Distractions) にあてはまる事柄は何なのか、仕分けに困っているようでした。たとえば、第二領域には部活、読書、就職活動、第三領域に友人との付き合い、外出、旅行などを書き込んでいましたが、「自分にとって何が重要なかがわからない。優先順位がわからない。」という理由から、第二領域ともいえるし第三領域ともいえるし、判断できないとのことでした。

このことから見えてきたのは、価値観がまだ定まっていない大学生にとって、このマトリックスの分類は少々難しいということです。大学生は新しいことに挑戦して自分の可能性を広げていく時期ですから、一見無駄に見えることでも試してみようという姿勢は大切です。そうした観点から、第三領域の活動を必ずしもゼロにする必要はありません。要は、第三領域の事柄におぼれないバランスが大切です。一方で、価値観の明確化というのは第二領域の活動に含まれるので、自分の価値観を少しずつ確立していくことができれば、だんだんと優先順位がつけられるようになるのだと思います。参加した学生たちには、こうしたことを伝えました。

次に、『いつも「時間がない」あなたに 欠乏の行動経済学』という書籍の内容から、時間がない人が陥りがちな罠とそこから脱するための方策を紹介しました。忙しく時間がないと感じている人こそ意識して「ゆとり (slack)」を確保することが重要です。ゆとりがあることによって、急なことや予想外のことにでも対処できます。ゆとりがない人は、常に負荷がかかった状態で問題に対処せざるを得ませんが、ゆとりがあれば落ちついた状態で持てる力をフルに発揮することができるので、物事にうまく対処できます。また、長期的な視点に立てることから問題を未然に防ぐことができ、第一領域 (Crisis) を避けることにつながります。

第二領域 (Zone) の活動である「将来への投資」にふだんから取り組むことの重要性はさまざまな研究から明らかにされています。最後に、今後取り組みたい「将来への投資」となる活動について参加者それぞれに考えてもらい、互いに発表し合いました。

終了後のアンケートでは、参加者全員が「参加してとてもよかった」もしくは「参加してよかった」と回答しました。参考になったこと・学べたこととしては、「自分の春学期の行動に満足できていない理由がクリアになり、参加して良かった」「タイムマネジメントについて学ぶ機会が今までなかったのでありがたい」「ゆとりをつくるという考え方がなかった。これから取り入れようと思う」「(時間管理のマトリックスの)4つの領域に分類することで、優先度がはっきりした」といった内容が寄せられました。

当日の様子は icuTV にアップされています。

[Workshop]

Time management Workshop 20160625

<http://icutv.icu.ac.jp/workshop/apc-20160625>

カテゴリ：Workshop

<http://icutv.icu.ac.jp/workshop/>

参考文献：

コヴィー・R・スティーブン『7つの習慣』川西茂訳、キングベアー出版、2010。

Covey,R.S., *The 7 Habits of Highly Effective People 25th Anniversary Edition*, Turtleback, 2014.

ムッライナタン, センディルム・シャフィール, エルダ『いつも「時間がない」あなたに 欠乏の行動経済学』(原題: *SCARCITY Why Having Too Little Means So Much*) 大田直子訳, 早川書房, 2015.

iPad を使用した授業支援

高嶋 香織

学修・教育センター

スマートフォンの普及やインターネット環境の充実でビデオ動画は私達の暮らしに欠かせないものになり、学生への学修支援ツールとしても年々増加しています。本学でも、高校生向けのコンテンツや大学メッセージを学外に向けて発信しています。またセミナーやワークショップなどを学内に公開し、出席できなかった学生への支援も行われるようになりました。更に、OpenCourseWare 事業の一環としての公開も行っており、反転授業としての活用やメジャー選択の手助けとして学修に役立っています。

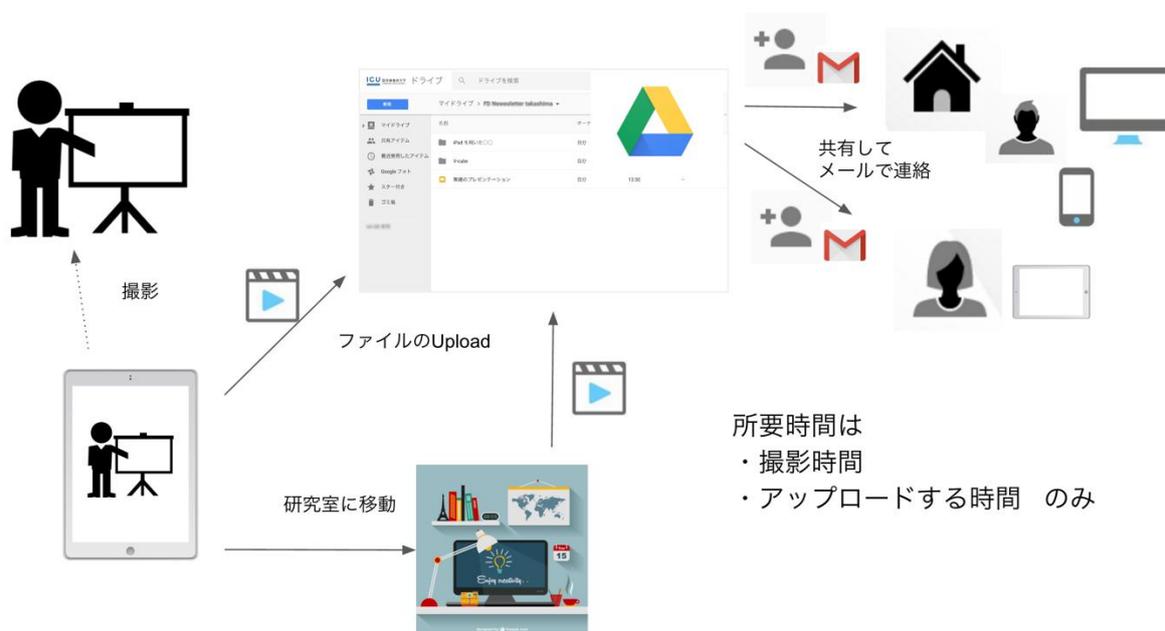
これまで撮影を行う場合、ビデオカメラを使用して撮影する事が一般的でした。しかし、「撮影後にファイルを取り出すにはどうしたら良いのか」、「見たことのない拡張子のファイルがある」、「容量が大きくて扱いに困る」という質問をよくいただいています。ビデオカメラを普段から使い慣れていない事や、70 分の授業撮影でファイルが大容量になり、

PC への取り込みや USB メモリへのコピーなどに長い時間を要する事が原因でした。

私たちは、ビデオ動画の有用性を認識すると共に、どうすれば手間取ること無く動画を活用出来るのかを探ってきました。確かに、ビデオカメラで撮影すると黒板の端まできれいに映ります。外部に向けて公開する必要がある場合には適しています。ですが、そこまでのクオリティが必要ない場合も多く存在すると思います。例えば、学生のプレゼンテーションや語学の発音練習、公開が学内のみのワークショップなどがあげられます。この場合は、出来るだけ素早く複数の人と共有し、お互いに確認したいのではありませんか。

それらを叶える手段として、iPad と Google Drive を使用し短時間で動画を共有する方法をご紹介します。

iPad と Google Drive を使用して、ビデオ動画を共有する方法



学生のプレゼンテーションなどを、

1. お手元のスマートフォン・タブレット端末でアプリを使用して撮影（ここでは iPad を例にあげています。）
2. 撮影後、Google Drive にアップロードまたは、研究室に戻った後、Google Drive にアップロード。
3. Google Drive 上で他の教員や学生と共有しメールを送付。
4. 共有者は自分の PC やスマートフォンなどで確認。

※ 動画ファイルの容量を撮影時に小さく圧縮するアプリを使用します。

この方法を使用した場合には、従来と比較して 4 つのメリットが挙げられます。

1. ファイル容量が小さい
2. 撮影後すぐに Google Drive にアップロード
3. 学生や教職員間で素早く共有
4. 閲覧するデバイスを選ばない

ビデオカメラで撮影すると、ファイル容量は 20 分で約 1GB 程度の大きさになります。1GB のファイルをアップロードしたり、読み込んだりするには時間が必要です。プレゼンテーションは 1 人だけという事は少ないでしょうから、人数分だけ作業時間が発生してしまいます。iPad を利用して撮影を行うと、20 分で 200MB 程度の大きさになり、学内など Wi-Fi 環境であれば授業終了後すぐにファイルをアップロードさせる事が出来るので研究室に戻ってそれから PC に接続するという手間が発生しません。更に、Google Drive を使用する事でグループティーチングの情報共有や、学生自身と共有する事が簡単になりました。その上共有した相手のデバイス (Mac、Windows、iOS、Android) を問わず、いつでもどこでも確認する事が出来るのです。

では、実際に撮影する時にはどちらの撮影方法が適しているのか、簡単に挙げてみたいと思います。判断のポイントは、以下の 2 点。「素早く共有する必要があるか」、「開催時間が短いか」です。

iPad はズームが得意ではないため、広い教室などで行われるオリエンテーションやワークショップなどはビデオカメラでの撮影が向いています。プレゼンテーションやペアワークなど終了後にメンバーで素早く共有したい場合には iPad が最適です。オリエンテーションでも、少人数開催で近くから撮影できるもの、時間の短いものは iPad で撮影可能です。

判断に迷われたら CTL までご相談ください。その他に、本館教室 (H-116, H-260, H-315) や理学館教室 (N-220)、国際会議室、本部棟会議室 (A-206) にて自動収録機器を設置しております。ビデオカメラを用意せずに撮影を行う事が出来ますので是非ご活用ください。

ビデオ動画には幾つかの用途があり、それぞれ最適な撮影方法を選択する事ができます。より目的に近い方法でコンテンツを作成し学修支援の 1 つとして役立てていければ良いと考えています。

シーン別の撮影方法



プレゼンテーション



ペアワーク



グループワーク

タブレットが最適



オリエンテーション



ワークショップ



セミナー

カメラが最適



開催時間が短い or 早く見せたい場合はタブレット!



実際に授業で利用された先生の声

サービス・ラーニングの実習後の授業では、毎年 50～60 名の学生のプレゼンテーションをビデオ動画にしています。各学生の指導と評価を担当するサービス・ラーニング (SL) アドバイザーの先生方 (約 20 名) にこの動画を見ていただくにあたり、効率的な方法をこの数年模索してきました。CTL スタッフの協力でビデオカメラを使って撮影したあと動画 DVD を作成したり、ファイルを共有したり、これまで様々な試行錯誤がありました。

今年、初めて iPad を試したところ、驚くほど操作が簡単で、自分で手軽に動画撮影とファイル共有をすることができました。iPad の撮影はスマホで動画を撮るのと同じ感覚です。ファイルのアップロードは、1 コマ分なら授業終了後にその場で一瞬のうちに完了します。ビデオカメラのほうが高画質ですが、学内共有が目的なら iPad の画質で必要十分です。先生方へはリンク URL をメールで送ってファイルを共有しています。1 クリックで担当学生の動画を見ていただけるので大変好評です。動画は個人情報への配慮から「閲覧のみ」という設定にして、学期終了時にファイルの共有設定を解除しています。これら作業も簡単です。授業のビデオ動画撮影、共有、管理が自分で素早くできるようになり、大変満足しています。

(サービス・ラーニング・センター コーディネーター/講師 黒沼敦子)

編集後記

今号もたくさんのご投稿ありがとうございました。どの記事も「教育・授業支援」・「学修支援」への示唆に富む内容となっており、情報共有ができることを嬉しく思っています。

今号では、タブレット端末やデジタル教材、インターネット等の情報通信技術（ICT）を組み合わせる教育実践の記事として、「iPadを利用した授業支援」と「“Flipping” a Classroom」（反転授業）という特色ある記事を掲載しました。従来の授業のスキルに加え ICT 関連のスキルが融合することで効果的・効率的に学びを獲得できる一例です。それぞれの体験やノウハウを発信することは、点と線から面へと広がり、ティーチングとラーニングの質の向上に繋がります。

FD ニュースレターを、ICU の教育・学修の場をさらに豊かにするツールとしてご活用ください。皆様からのニュースレターへのご投稿をお待ちしています。

記事についてのご意見ご感想などがありましたら、お気軽に ctl@icu.ac.jp までお寄せください。

南 和子
学修・教育センター

Published by Center for Teaching and Learning
International Christian University

ILC-212 3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo 181-8585 Japan
Phone: (0422)33-3365 Email: ctl@icu.ac.jp
